発刊にあたって

諫早市は、長崎県の中央部に位置しており、古代から現代まで交通の要衝としてその歴史を刻んできました。令和元年には長崎街道沿いに架けられていた眼鏡橋が架橋180年を迎え、長崎街道の有明海側を通る『多良海道』が文化庁選定の『歴史の道百選』に選ばれました。

埋蔵文化財の発掘調査は、地域の歴史を解明していく方法の一つです。埋蔵文化財（遺跡）は、各種開発事業により消失するおそれがありますので、開発予定地に遺跡の所在が想定される場合、事前に発掘調査を行い、遺跡の内容を記録保存し後世に伝えていくことが文化財保護法により義務付けられています。

本書は、平成27年度から令和元年度にかけて、国庫・県費補助事業として実施した各種開発に伴う試掘・範囲確認調査及び保存目的のための学術調査や測量調査の結果をまとめたものです。開発に伴う調査は、個人住宅から工業団地造成などによる大規模なものまで対応した結果を掲載しております。また、保存目的の調査等は、市指定史跡「大村街道」に付属する大渡野番所跡の測量調査や大型木製出土品である市指定文化財「唐比のくり舟」の保存処理の記録など多様な学術的な成果を掲載しております。

調査結果については本書記載のとおりですが、今回、得られました考古学的な成果や出土品が本書とともに、今後の地域の歴史研究の一助として活用されるだけでなく、文化財保護への理解を深める契機となることを切に願う次第であります。

発刊にあたり、発掘調査及び出土品の整理作業に従事していただきました皆様をはじめ、関係各位に賜りました深い御理解と多大なる御協力に対しまして、心より厚くお礼申し上げます。

令和３年３月

諫早市教育委員会
教育長　西　村　暢　彦

例　　言

1　本書は諫早市教育委員会が、平成27年度から令和元年度にかけて国・県の補助を受けて実施した埋蔵文化財の発掘調査（保存目的のための学術調査、各種開発に伴う試掘・範囲確認調査）の調査結果、出土品の保存処理の結果を掲載したものである。

2　調査は、諫早市政策振興部文化振興課が担当した。
調査体制は「第Ⅰ章　第３節　調査体制」を参照されたい。

3　調査により得られた出土遺物、調査及び整理作業にかかる図面・写真類は諫早市政策振興部文化振興課が管理し、諫早市美術・歴史館で保管している。

4　本書の編集は新井実和が行った。執筆は、第Ⅰ章第３節、第Ⅱ章第２節１・３・４、第Ⅱ章第３節を野澤が行い、第Ⅱ章第４節を野澤哲朗・新井、その他を新井が行った。

5　第Ⅱ章第４節は令和元年度「長崎県埋蔵文化財センター研究紀要第10号」へ掲載したものを再編集した。

6　第Ⅱ章第２節２大渡野番所跡の採集遺物実測は新井と橋本幸男（調査指導委員）が行い、トレースは柿田佳央理（諫早市美術・歴史館専門員）が行った。

目　　次

第Ⅰ章　調査の概要……1
　第１節 諫早市の位置と歴史的環境
　第２節 調査概要
　第３節 調査体制
第Ⅱ章　調査の成果……5
　第１節　試掘・範囲確認調査
　第２節　保存目的の調査……17
　　1　市指定史跡「大峰古墳」
　　2　大渡野番所跡
　　3　禁教期関連遺跡調査（ジブの墓・ビッチの墓）
　　4　禁教期関連遺跡調査（金谷遺跡の織部灯籠・新道町の織部灯籠）
　第３節　開発に伴う範囲確認調査……63
　　1　駄森積石塚
　第４節　大型木製出土品の保存処理……69
　　市指定文化財「唐比のくり舟」保存処理

報告書抄録

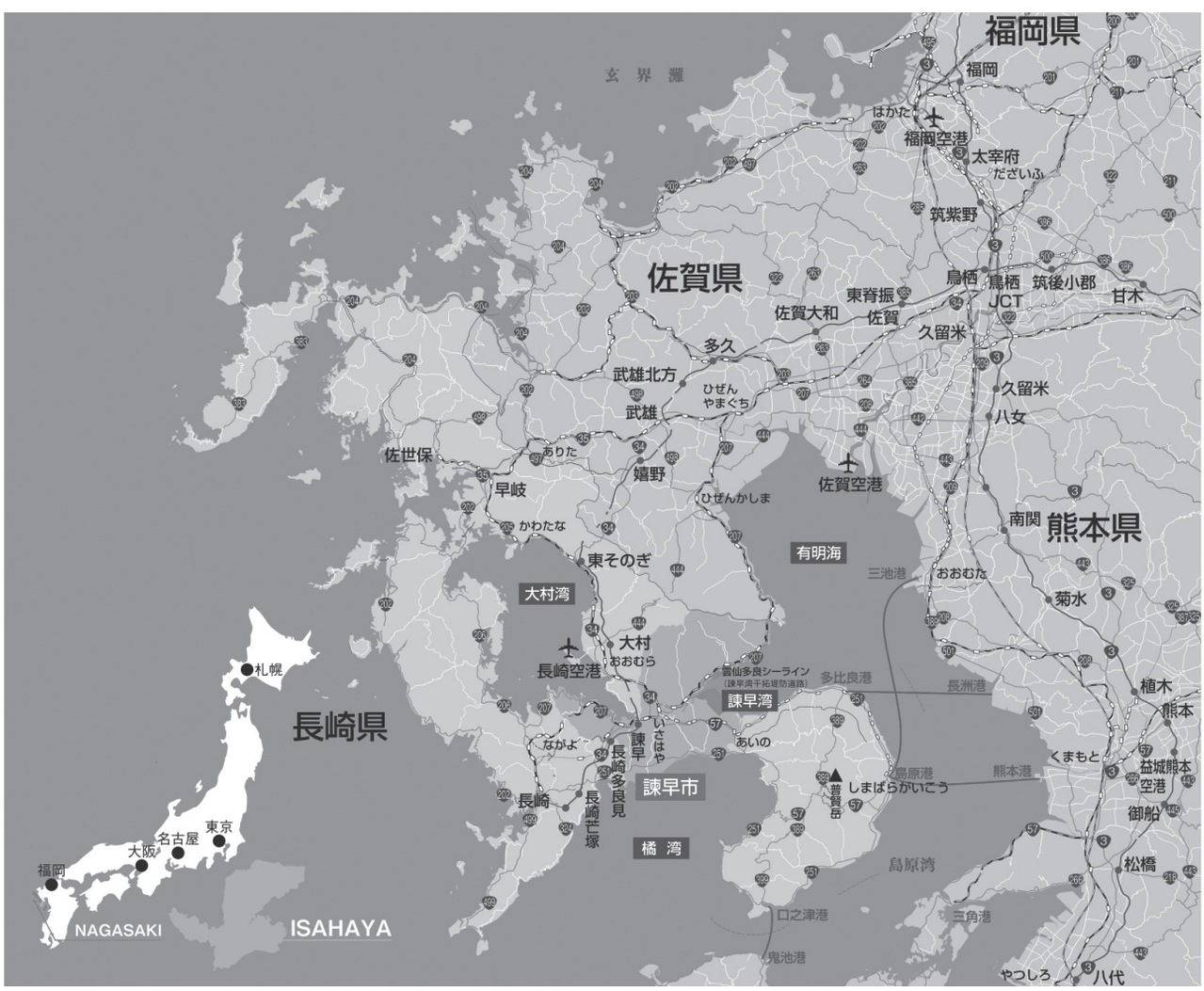
第Ⅰ章　調査の概要

第１節　諫早市の位置と歴史的環境

諫早市は、長崎県の中央に位置し、長崎市・大村市・雲仙市・西彼杵郡長与町と佐賀県太良町に接する。市西部は県の中心となる内海である大村湾、東部は有明海に通じる諫早湾、南部は熊本県天草灘に通じる橘湾に面し、北部には多良岳があり、自然豊かな海と山に囲まれている。多良山系南部からは長崎県唯一の一級河川である本明川が諫早湾に流れる。

長崎県最大の諫早平野では、奈良時代より多くの条里が施行され、戦国時代には本明川の豊富な水を利用して用水（小野用水）を整備し、有明海の干潟を日本最大と言われるまでに広大に干拓し、現在に至るまで長崎県の農業を支えている。

また、奈良・平安時代の律令制下では高来郡（たかきのこおり）に属し、鎌倉時代には『八幡宇佐神宮領大鏡』（建久８（1197）年）に「伊佐早村」として「いさはや」地名が初めて歴史に登場し、正和３（1314）年には京都仁和寺領となる。その後、南北朝期の騒乱を経て、西郷氏が統治するも、天正15（1587）年、秀吉の命により、龍造寺氏が攻め入り、龍造寺氏は「諫早」と姓を改め、統治後は「佐賀藩諫早領」となり、江戸時代を通じて諫早家は佐賀藩の「親類同格」として、藩政の一翼を担った。



第１図　諫早市の位置

また、諫早は長崎半島、島原半島、西彼杵半島の結節部にあたり、古くから交通の要衝として重要な役割を果たしてきた。『延喜式』（延長５（927）年）兵部省諸国駅伝馬条によると「船越駅」が設置され、古代官道として機能していたことがわかっている。江戸時代に入ってからも、豊前小倉から肥前長崎までの連絡路として多良海道、大村街道、島原街道という基幹となる交通網が整備され、街道沿いには宿場町が繁栄し、情報の伝達や物資の運搬などの拠点として重要な役割を果たした。特に、長崎警備の一端を担っていた佐賀藩は有明海回りの多良海道を年に３回利用するなど、国防のためにも欠かせない街道であった。多良海道は令和元年に文化庁の「歴史の道百選」に追加選定され、大村街道と多良海道はともに文化財としても価値の高い街道（交通遺跡）となった。

現在においても、国道34号（長崎―鳥栖間）、57号（長崎―島原―大分間）、207号（時津―小長井―佐賀間）、251号（諫早―国見―加津佐―長崎間）の国道、長崎自動車道（高速道路）、JR長崎本線・大村線、島原鉄道が諫早駅で交差するなど交通の要衝という地理的な特殊性は変わらない。

第２節　調査概要

１　各種開発に伴う試掘・範囲確認調査

平成27年度から令和元年度にかけて各種開発に伴い、19箇所において試掘・範囲確認調査を実施した。表１は文化振興課窓口での埋蔵文化財包蔵地の確認依頼の件数である。調査原因としては、個人住宅建設が最も多く、次に公共工事計画、次いで民間工事計画である。調査後の措置としては、平成28年度の萬福寺跡、平成29年度の駄森積石塚、令和元年度の上峰ノ原遺跡は保存措置、外15件は工事着手（慎重工事）とした。令和元年度の上峰ノ原遺跡に関しては、調査終了後令和２年度に入り、建物基礎部分の掘削の際に工事立会を行った。

表１　周知の埋蔵文化財包蔵地の確認依頼件数

年度	遺跡内	遺跡外	隣接地	総件数
H27	19	340	6	365
H28	33	337	1	371
H29	32	569	7	608
H30	19	398	4	421
R1（H31）	43	400	2	445

２　保存目的の調査

平成28年４月に発生した熊本地震により、市指定史跡「大峰古墳」の石室の構成石材にずれが生じたため、現状の記録保存のため石室実測を行った。実測の方法は写真実測である。**（第Ⅱ章第２節１）**

平成30年度、市指定史跡「大村街道」に付属する大渡野番所跡の石垣が樹木の根による崩壊の恐れがあったため、現状を記録保存するための地形測量を行った。**（第Ⅱ章第２節２）**

令和元年度には、すでに知られているキリスト教禁教期の石塔を記録するための実測作業を行った。調査対象は地域伝承の残る早見町のジブの墓、天神町のビッチの墓の自然石墓塔２基と、長年「キリシタン灯籠」と伝えられてきた金谷遺跡及び新道町の織部灯籠２基の石造物測量調査を行った。**（第Ⅱ章第２節３、４）**

３　開発に伴う範囲確認調査

平成29年度、南諫早産業団地の造成計画に伴う駄森積石塚の範囲確認調査を行った。開発は駄森積石塚まで

及ばず、調査後の措置は保存となった。**（第Ⅱ章第３節）**

４　市指定文化財「唐比のくり舟」保存処理

平成27年度から平成30年度にかけて、長年水槽内で展示を行ってきた市指定有形文化財「唐比のくり舟」の価値を市民に広く周知することを目的として、年代測定・樹種同定を経て、トレハロース含浸法による保存処理を行い、空気中での保存・展示を可能とした。**（第Ⅱ章第４節）**

（2020年３月長崎県埋蔵文化財センター『研究紀要第10号』に報告した内容を掲載）

第３節　調査体制

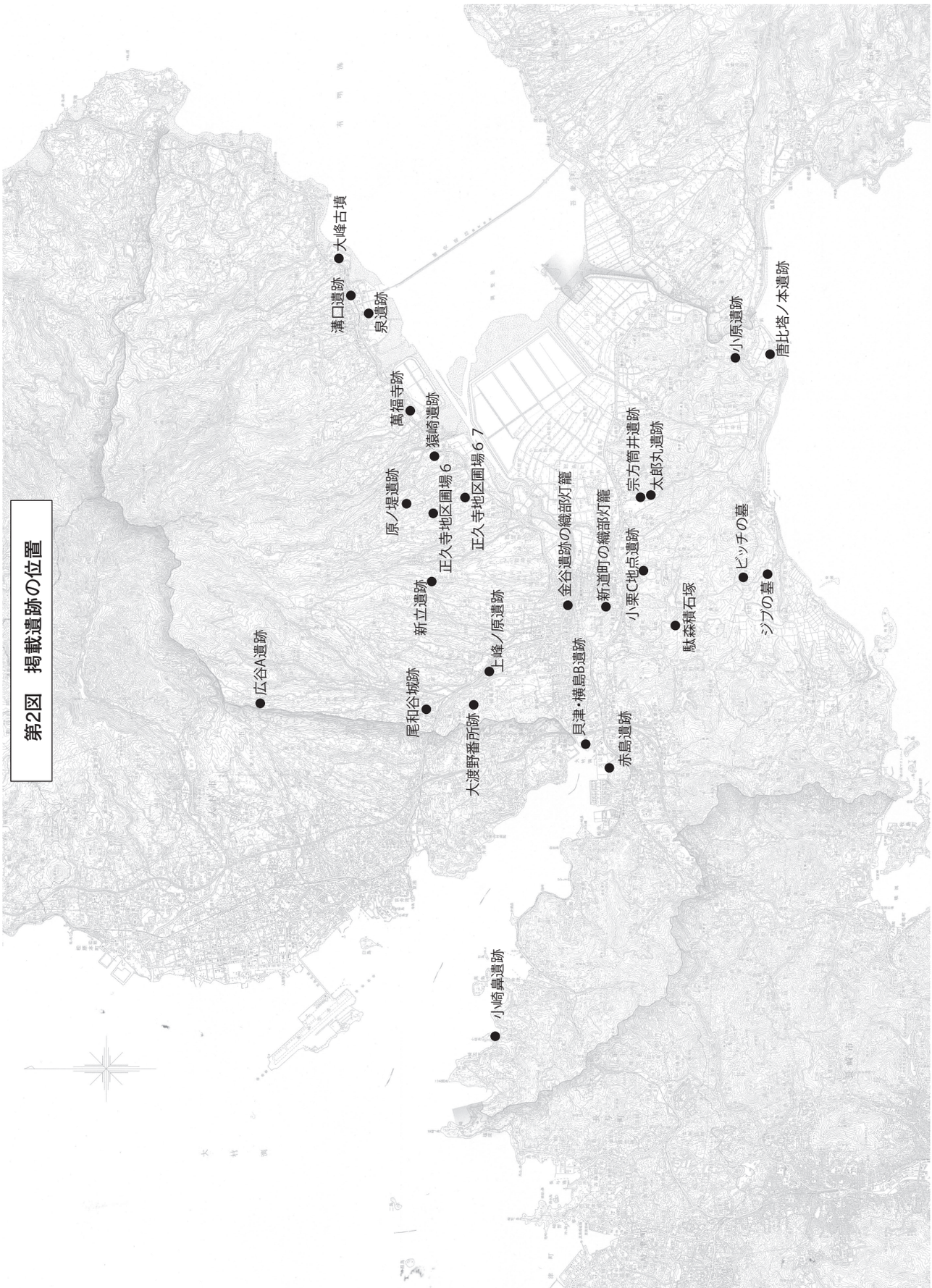
平成27年度から令和２年度にかけての調査体制については下記のとおりである。

諫早市教育委員会

教育長	平野　博	（H21.５.18～H29.５.17）
	西村　暢彦	（H29.５.18～　）
教育次長	石橋　直子	（H26.４.１～H28.３.31）
	井上　良二	（H28.４.１～H31.３.31）
	髙柳　浩二	（H31.４.１～　）

諫早市政策振興部　文化振興課（H26.４.１付け教育委員会から政策振興部へ：機構改革）

課長	中溝　文明	（H26.４.１～H28.３.31）	
	江頭　洋子	（H28.４.１～H29.４.25）	
	吉谷　成彦	（H29.４.26～H31.３.31）	
	諸岡　昌史	（H31.４.１～　）	
課長補佐	江頭　洋子	（H26.４.１～H28.３.31）	
	加嶋　博文	（H28.４.１～H30.３.31）	
	坪内　理子	（H30.４.１～Ｒ２.３.31）	
	木下　誠	（Ｒ２.４.１～　）	
参事補	木下　誠	（H29.８.１～Ｒ２.３.31）	
主任	佐々田与人	（H26.４.１～H28.３.31）	
	松山　貴子	（H28.４.１～H29.７.31）	
	執行　徳幸	（H28.８.１～Ｒ１.７.31）	
	中村　和哉	（Ｒ１.８.１～　）	
	野澤　哲朗	（Ｒ１.８.１～　）	調査担当
事務職員	野澤　哲朗	（H26.４.１～Ｒ１.７.31）	調査担当
	森　健史	（H27.４.１～H28.７.31）	
	庄　英徳	（H28.４.１～H31.３.31）	
	大浦　美香	（H31.４.１～　）	
	岡﨑　奈々	（Ｒ２.４.１～　）	
文化財調査員	田苗　隆史	（H26.４.１～H29.３.31）	調査担当
	前田　加美	（H29.４.１～H31.３.31）	調査担当
文化財専門員	新井　実和	（H31.４.１～　）	調査担当


第2図　掲載遺跡の位置
大峰古墳
溝口遺跡
泉遺跡
萬福寺跡
猿崎遺跡
原ノ堤遺跡
正久寺地区圃場６
正久寺地区圃場６７
広谷A遺跡
新立遺跡
上峰ノ原遺跡
尾和谷城跡
大渡野番所跡
金谷遺跡の織部灯籠
新道町の織部灯籠
貝津・横島B遺跡
赤島遺跡
小栗C地点遺跡
宗方筒井遺跡
太郎丸遺跡
駄森積石塚
ビッチの墓
ジプの墓
小原遺跡
唐比塔ノ本遺跡
小崎鼻遺跡

第Ⅱ章　調査の成果

第１節には、国庫補助事業として実施した市内遺跡調査の結果について、平成27年度から令和元年度実施分の調査地点とその後の遺跡の取り扱いを掲載する。

表２　平成27年度から令和元年度までの調査等一覧

年度	遺　跡　名	調　査　地	原　因	期　間	面　積	調査区分	措　置
H27	溝口遺跡	諫早市高来町山道字坊原564－1	駐車場用地の造成	H27.8.13～H27.9.11	4㎡	範囲確認	慎重工事
	新立遺跡	諫早市福田町1642－9外4筆	太陽光発電用地の造成	H27.10.26～H27.10.11	16㎡	範囲確認	慎重工事
	小原遺跡	諫早市森山町唐比北字小原276-1	個人専用住宅建設に伴う造成	H28.3.1～H28.3.28	4㎡	範囲確認	慎重工事
H28	泉遺跡	諫早市高来町泉221外5筆	圃場整備計画	H28.4.26～H28.5.20	1㎡	範囲確認	慎重工事
	小崎鼻遺跡	諫早市多良見町佐瀬字小崎905-1	道路拡幅に伴う個人住宅の移転	H28.5.31～H28.6.24	4㎡	範囲確認	慎重工事
	萬福寺跡	諫早市高来町下与字内蔵床290-7、291-1・5	民間造成計画	H28.9.9～H28.10.7	4㎡	範囲確認	現地保存
	貝津・横島Ｂ遺跡	諫早市貝津町1280外9筆	民間造成計画	H28.11.24～H28.12.16	4.33㎡	範囲確認	慎重工事
	諫早市指定遺跡「大峰古墳」	諫早市小長井町大峰927－3	熊本地震に伴う石室入口構成石材のずれ	H28.12.9～H29.1.25	―	大峰古墳（保存）	石室測量図作成
	広谷A遺跡	諫早市上大渡野町2691-3	道路拡幅計画	H29.2.15～H29.3.21	4㎡	範囲確認	慎重工事
H29	正久寺地区の圃場6	諫早市正久寺町1228-2	圃場整備計画	H29.6.9～H29.7.31	8㎡	試掘	慎重工事
	猿崎遺跡	諫早市猿崎町901番1	個人住宅建設	H29.6.28～H29.8.10	4㎡	範囲確認	慎重工事
	赤島遺跡	諫早市久山町2965－1	個人住宅建設	H29.9.26～H29.10.20	4㎡	範囲確認	慎重工事
	太郎丸遺跡	諫早市宗方町701－1、701－2、702－2	個人住宅建設	H29.10.20～H29.11.17	4㎡	範囲確認	慎重工事
	正久寺地区の圃場67	諫早市正久寺612及び649－1の畑地内	圃場整備計画	H29.11.17～H30.1.31	8㎡	試掘	慎重工事
	駄森積石塚	諫早市栗面町541番地2の一部	産業団地建設予定地	H30.2.16～H30.3.19	4.37㎡	範囲確認	保存 ※詳細報告

年度	遺　跡　名	調　査　地	原　因	期　間	面　積	調査区分	措　置
H30	尾和谷城跡	諫早市下大渡野町2367番2及び2368番2	鉄塔建設	H30.10.19～H30.12.3	8㎡	範囲確認	慎重工事
	大渡野番所跡	諫早市下大渡野町268番	保存目的	H31.2.14～H31.3.15	―	測量調査	保存 ※詳細報告
R1	宗方筒井遺跡	諫早市宗方町617番1	個人住宅建設	H31.4.18～R1.5.23	4㎡	範囲確認	慎重工事
	原ノ堤遺跡	諫早市白原町2336-2及び2411	農村地域防災減災事業（ため池整備事業）	R1.11.14～R1.12.17	8㎡	範囲確認	慎重工事
	上峰ノ原遺跡	諫早市下大渡野町62番1、63番5、64番	個人住宅建設	R1.12.18～R2.2.20	4㎡	範囲確認	慎重工事
	小栗Ｃ地点	諫早市小川町752-2の一部、753	宅地用分譲地造成	R1.12.26～R2.2.18	4㎡	範囲確認	慎重工事
	有喜地区禁教期関連調査	ジブの墓 諫早市早見町955-1	自然石墓標	R1.12.4～R2.2.17	1基	測量調査	保存目的
		ビッチの墓 諫早市天神町1283	自然石墓標		1基	測量調査	保存目的
	諫早地区禁教期関連調査	金谷遺跡 諫早市金谷町71	織部灯籠	R2.2.12～R2.3.28	1基	測量調査	保存目的
		新道町の織部灯籠 諫早市新道町976-1	織部灯籠		1基	測量調査	保存目的

表３　出土品の調査・保存処理（H27～30）

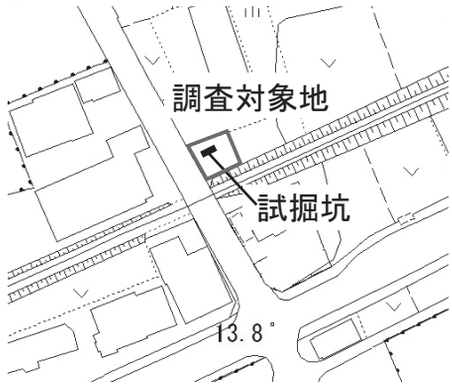
年度	名　　称	概　　略	内　　容	期　間	指　定	結　果
H27	唐比のくり舟 （唐比唐ノ本遺跡）	唐比のくり舟１艘 長さ450cm 最大幅80cm	市指定文化財の調査（自然科学的年代測定・樹種同定）	H27.4.22～H27.8.30	市指定文化財（保存）	平安時代に伐採 樹種はクス ※結果は年報Ⅱに報告
H28～H30			市指定文化財の保存（トレハロース含浸処理・補填処理）	H28.7.14～H31.3.16		空気中での露出展示が可能となる

第１節　試掘・範囲確認調査

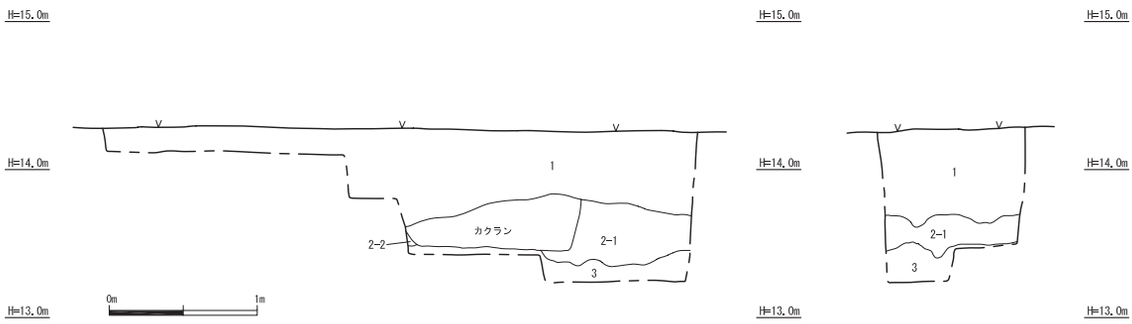
平成27年度調査（調査３箇所）

１　溝口遺跡（みぞぐちいせき）

（１）調 査 地　諫早市高来町山道字坊原564-1
（２）調査原因　駐車場用地造成
（３）調査期間　平成27年８月13日～
　　平成27年９月11日
（４）調査区分　範囲確認調査（４㎡）
（５）調査措置　慎重工事



第３図　H27溝口遺跡調査箇所



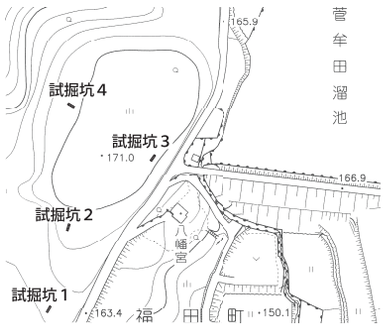
第４図　H27溝口遺跡土層図

【土層】

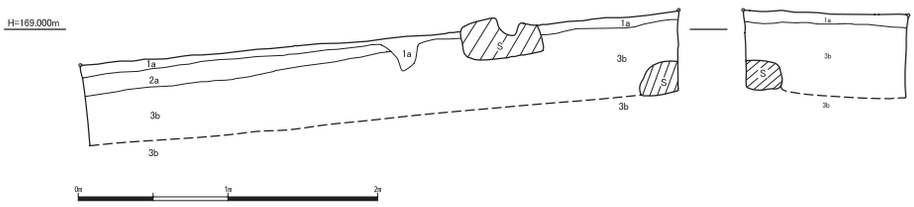
１層：黒褐色土（Hue7.5YR3/2）表土。しまりなし。土器片が２点出土している。
２-１層：暗褐色から褐色土（Hue10YR3/3～10YR4/4）直径５～30㎜の黄褐色土ブロックが混じる。ややしまる。遺物は確認されなかった。旧耕作土の可能性あり。
２-２層：暗褐色土（Hue10YR3/4）しまりなし。遺物は確認されなかった。
３層：にぶい黄褐色土（Hue10YR4/3）地山と思われる。かたくしまる。遺物は確認されなかった。

２　新立遺跡（しんたちいせき）

（１）調 査 地　諫早市福田町1642-9外４筆
（２）調査原因　太陽光発電用地造成
（３）調査期間　平成27年10月26日～
　　平成27年12月11日
（４）調査区分　範囲確認調査（16㎡）
（５）調査措置　慎重工事



第５図　H27新立遺跡調査箇所



第６図　H27新立遺跡土層図（試掘坑２）

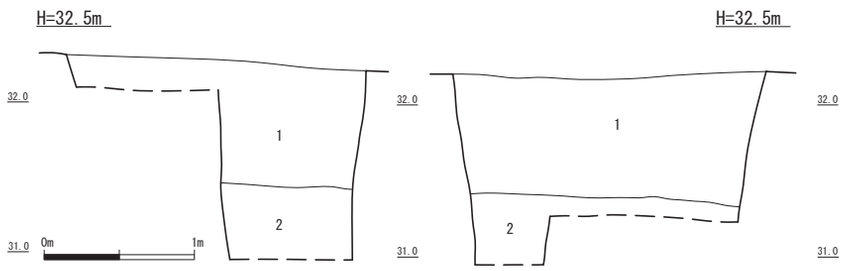
【土層】

１a層：暗黒褐色軟質土層（Hue7.5YR4/1）腐葉土。無遺物層。
２b層：暗赤褐色硬質土層（Hue2.5YR3/2）やや粘質がある硬い土である。試掘坑北側に熱く堆積する。釘・金具が混入する。攪乱土。
３b層：黄褐色硬質土層（Hue2.5Y5.6）非常に硬質な土である。地山。中前後谷遺跡のⅣ層と似ており、同一層である可能性が高い。

３　小原遺跡（こはらいせき）

（１）調 査 地　諫早市森山町唐比北字小原276-1
（２）調査原因　太陽光発電用地造成
（３）調査期間　平成28年３月１日～
　　平成28年３月28日
（４）調査区分　範囲確認調査（４㎡）
（５）調査措置　慎重工事

第７図　H27小原遺跡調査箇所



第８図　H27小原遺跡土層図

【土層】

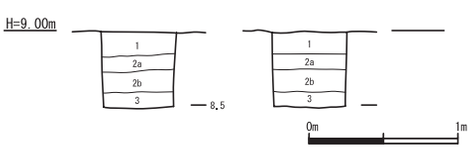
１層：暗褐色～褐色土層（Hue10YR3/4 ～ 4/4）表土及び盛土。ボソボソしたしまりのない粘質土。ブロック状にやわらかい土が入り、ビニールが混じる。近年、近くの造成地から搬入された盛土。地表面付近からのみ土器片・陶磁器片・黒曜石片が17点出土している。遺物は流れ込みによるもの。
２層：暗褐色土（Hue7.5YR3/4）しまりのある粘質土。直径10 ～ 20mm程の小礫が確認された。遺構・遺物は確認されなかった。盛土以前の旧耕作土の可能性が高い。

平成28年度調査（調査６箇所）

１　泉遺跡（いずみいせき）

（１）調 査 地　諫早市高来町泉221外５筆
（２）調査原因　圃場整備計画
（３）調査期間　平成28年４月26日～
　　平成28年５月20日
（４）調査区分　範囲確認調査（１㎡）
（５）調査措置　慎重工事

第９図　H28泉遺跡調査箇所



第10図　H28泉遺跡土層図（試掘坑１）

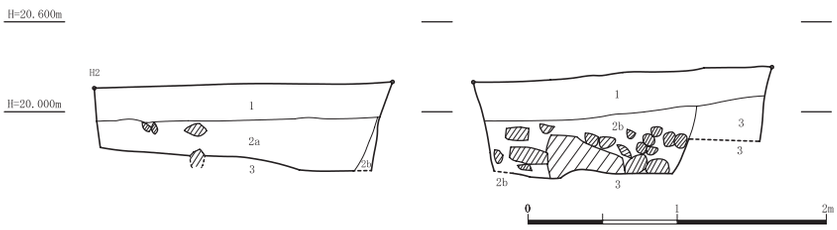
【土層】

１層：黒褐色土層（Hue10YR3/2）耕作土。ふわふわしたしまりのない土。
２a層：暗褐色土層（Hue10YR3/3）床土。硬くしまった粒子の細かい粘質の粒子の細かい砂質土。微小な白色粒が混じる。
２b層：にぶい黄褐色土層（Hue10YR4/3）床土。硬くしまった粘質の砂質土。鉄分沈着層。１～３㎜程度の白色粒・黄色粒が多く混じる。
３層：黒褐色土層（Hue10YR2/2）ややしまりの弱い砂質土。2a層2b層に比べ粒子はやや粗い。３～５㎝程の小円礫が混じる。
４層：にぶい黄褐色土層（Hue10YR4/3）硬い地山。風化してきている。

２　小崎鼻遺跡（こざきばないせき）

（１）調 査 地　諫早市多良見町佐瀬字小崎905-1
（２）調査原因　道路拡幅に伴う個人住宅の移転
（３）調査期間　平成28年５月31日～
　　平成28年６月24日
（４）調査区分　範囲確認調査（４㎡）
（５）調査措置　慎重工事

第11図　H28小崎鼻遺跡調査箇所



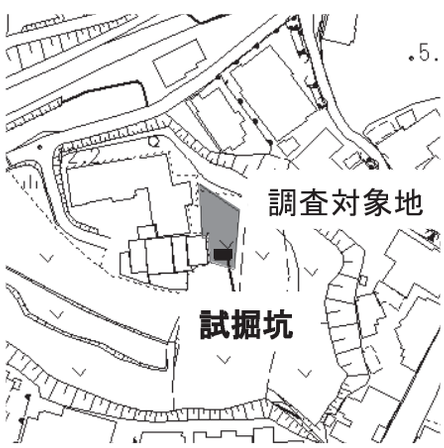
第12図　H28小崎鼻遺跡土層図

【土層】

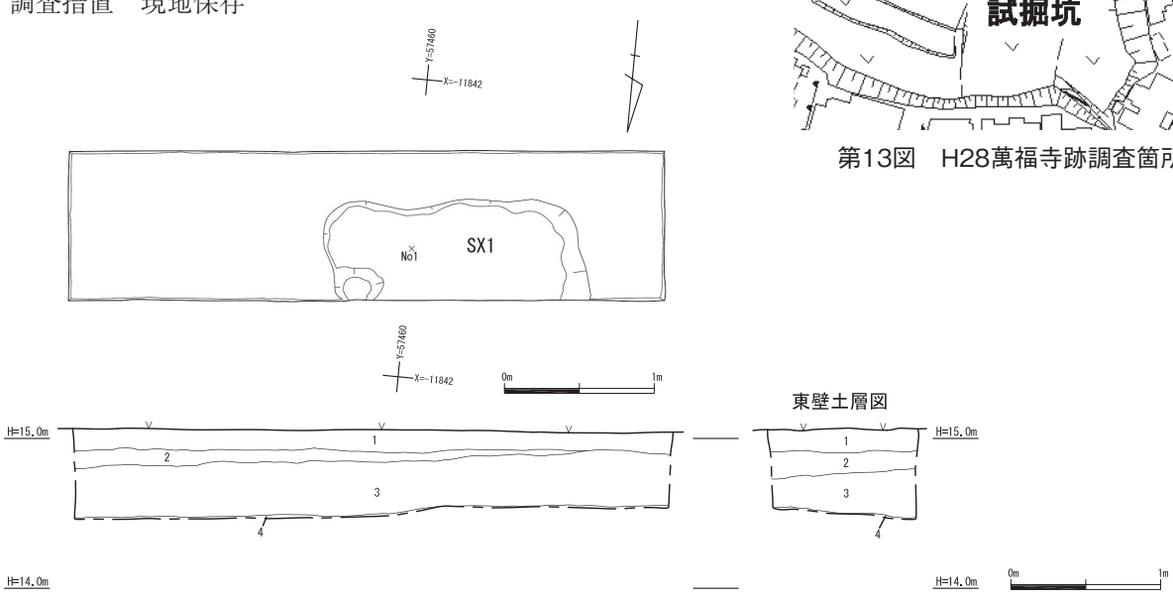
１層：暗褐色粘質土層（Hue10YR3/3）表土、耕作土である。暗褐色でやや粘性を持つ土である。近現代の磁器が18点出土している。調査地付近をみかん畑に造成した際に堆積した土と考えられる。西壁は北から南へ傾斜している。
２a層：暗褐色混礫土層（Hue10YR5/8）やや黄色味を帯びる。５cmから10cm程度の礫が混じる硬質な土である。調査地周辺を造成する際に元々堆積していた土と地山である３層が重機で攪乱されて堆積した土と考えられる。遺物は出土していない。2a層が硬質な土質である理由としては重機で固められた可能性があげられる。
２b層：やや軟質な土であり、５cmから15cmほどの小礫及び40cm程の巨礫が多量に混じる。2a層と同様にみかん畑に造成する際に堆積したと思われる。2b層の堆積している地点は地形が傾斜していたため、造成工事において地形を平らにするために、土中の礫とともに埋められた土と考えられる。なお、2b層が確認された試掘坑の南西部は北西から南西へ傾斜している。近現代の陶磁器が６点出土している
３層：淡赤褐色混礫硬質土層（Hue2.5YR5/8）20cmから80cm程の礫を含む非常に硬質な土である。３層に混じる礫は節理状に剥離している点が特徴である。調査区周辺に露出している層と同様のものであり地山と考えられる。

３　萬福寺跡（まんぷくじあと）

（１）調 査 地　諫早市高来町下与字内蔵床290-7、
　　291-1・5
（２）調査原因　民間造成計画
（３）調査期間　平成28年９月９日～
　　平成28年10月７日
（４）調査区分　範囲確認調査（４㎡）
（５）調査措置　現地保存



第13図　H28萬福寺跡調査箇所



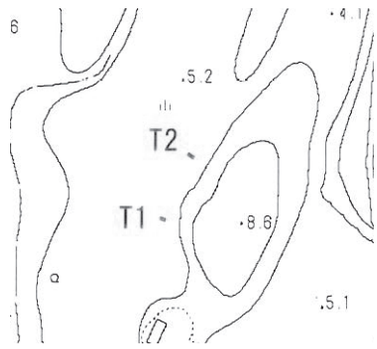
第14図　H28萬福寺跡平面図・土層図

【土層】（H28萬福寺跡土層図注記）

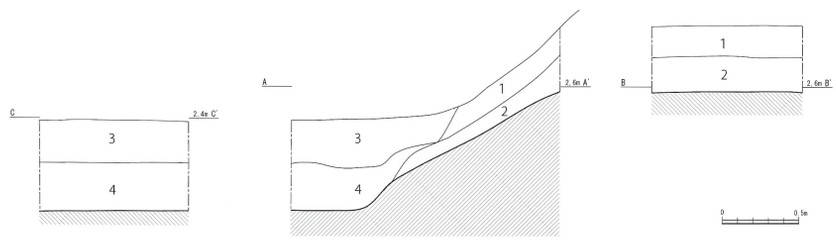
１層：暗褐色土層（Hue10YR3/4）表土。しまりなし。土器片が２点、陶磁器片３点、黒曜石が１点出土した。
２層：にぶい黄褐色土層（Hue10YR4/3）直径２～10㎜の炭化物が混じる。ややしまる。陶磁器片２点が出土した。不明遺構（SX1）が検出されたが、根穴の可能性が非常に高い。埋土内からは、酸化鉄塊と須恵器が出土した。
３層：褐色粘質土層（Hue10YR4/4）直径２～５㎜の炭化物が混じる。ややしまる。弥生土器片１点、土師器１点が出土した。
４層：黄褐色土層（Hue10YR5/6）地山。かたくしまる。

４　貝津・横島Ｂ遺跡（かいづ・よこしまびーいせき）

（１）調 査 地　諫早市貝津町1280外９筆
（２）調査原因　民間造成計画
（３）調査期間　平成28年11月24日～
　　平成28年12月16日
（４）調査区分　範囲確認調査（４㎡）
（５）調査措置　慎重工事



第15図　H28貝津・横島Ｂ遺跡調査箇所


第16図　H28貝津・横島Ｂ遺跡土層図（T1土層）

【土層】

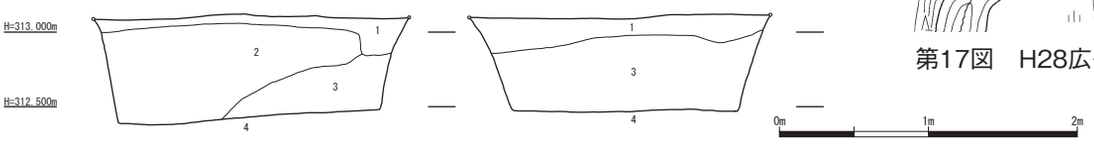
１層：褐灰色土層（Hue5YR5/1）表土。
２層：暗赤褐色土層（Hue5YR3/2）粘性あり。しまり弱。植栽痕の影響を受けた風化岩盤土を主体とする地山直上層。
３層：にぶい橙色土層（Hue5YR5/4）粘性あり。固くしまる。風化岩盤土を主体とした現代の盛土。
４層：にぶい橙色土層（Hue5YR5/4）粘性あり。固くしまる。３層と近似するが風化岩盤の礫ブロックを含む。ビニールが混入していたことで現代の盛土とする。

５　市指定史跡「大峰古墳」（おおみねこふん）は、第２節１（17ページ）に詳細報告

６　広谷Ａ遺跡（ひろたにえーいせき）

（１）調 査 地　諫早市上大渡野町2691-3
（２）調査原因　道路拡幅計画
（３）調査期間　平成29年２月15日～
　　平成29年３月21日
（４）調査区分　範囲確認調査（４㎡）
（５）調査措置　慎重工事

第17図　H28広谷Ａ遺跡調査箇所



第18図　H28広谷Ａ遺跡土層図

【土層】

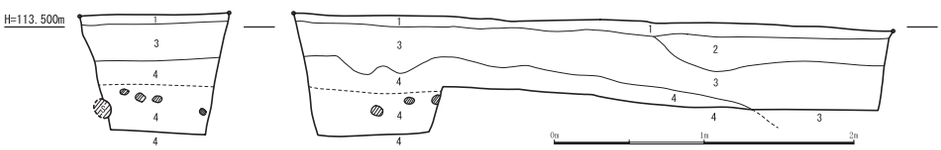
１層：暗褐色軟質土層（Hue10YR4/1）表土、締まりなく、軟らかな土である。ビニール、瓦等を含む。調査地付近を隣接道路の高さに造成した際に堆積した土と考えられる。
２層：灰褐色軟質土層（Hue10YR5/1）ビニール、瓦、コンクリート片、アスファルト片等を大量に含む。隣接道路造成の際の埋土と考えられる。一部焼土を含む、ゴミを焼いた可能性がある。
３層：黄褐色混礫硬質土層（Hue2.5YR5/3）埋土。５㎝～15㎝程の礫が混じる硬質な土である。瓦も少量含む。隣接道路造成の際に重機で固められた可能性があげられる。
４層：暗褐色粘質土層（Hue10YR3/2）きめが細かく粘性の強い土である。隣接道路の高さに造成される以前の地表面の土と考えられる。

平成29年度調査（調査６箇所）

１　正久寺地区圃場整備計画地の圃場６

（１）調 査 地　諫早市正久寺町1228-2
（２）調査原因　圃場整備計画
（３）調査期間　平成29年６月９日～
　　平成29年７月31日
（４）調査区分　試掘調査（８㎡）
（５）調査措置　慎重工事

第19図　H29正久寺地区の圃場６調査箇所



第20図　H29正久寺地区の圃場６土層図（試掘坑１）

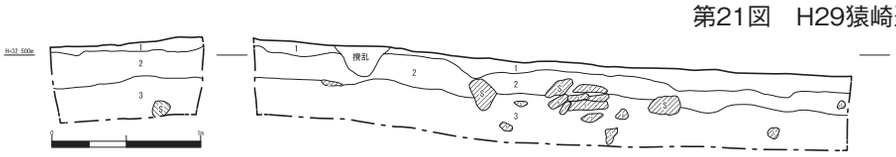
【土層】

１層：淡茶褐色軟質土層（Hue10YR6/2灰横褐）調査対象地全域に２㎝～８㎝の厚さで堆積する非常に軟質な耕作土である。遺物は確認されていない。
２層：暗褐色硬質土層（Hue2.5Y7/8明横褐）試掘坑１・２の東側に堆積する硬質な土である。試掘坑１は、３層が傾斜して堆積する東側の部分の上位に堆積しており、地形を平らにする役割を果たしている。また、試掘坑２は、３層の中間に確認される。層中から現代の磁器片、安山岩片が１点ずつ出土している（試掘坑２）。試掘坑１・２の堆積状況から２層は現在のような段上地形に造成された際に切り土及び盛土された土と考えられる。土地造成が行われる以前は試掘坑の西側に堆積していた可能性が高い。
３層：暗赤褐色硬質土層（Hue5YR4/6赤褐）試掘坑１・２の東側に堆積する非常に硬質な土である。試掘坑１・２いずれも西から東へ傾斜して堆積している。層中からは現代の陶磁器・金属片及び黒曜石が出土している（試掘坑１・２）。２層と同様に土地造成された際に切り土及び盛土されて攪乱された土である可能性が高い。また、同じ様に土地造成が行われる以前は西から東へ傾斜して堆積したと思われる。土地造成で攪乱を受ける以前の３層は出土した黒曜石の包含層であったと考えられる。
４層：暗褐色硬質混礫土層（Hue5YR4/2灰褐）試掘坑１・２に堆積する非常に硬質な土である。試掘坑１は下部に10㎝程の礫を含み試掘坑２は50㎝程の礫を含む。３層と同じように西から東へ傾斜して堆積している。なお、西側の上層が波形に堆積している原因は現代の耕作によるものであろう。

２　猿崎遺跡（さるざきいせき）

（１）調 査 地　諫早市猿崎町901-1
（２）調査原因　個人住宅建設
（３）調査期間　平成29年６月28日～
　　平成29年８月10日
（４）調査区分　範囲確認調査（４㎡）
（５）調査措置　慎重工事

第21図　H29猿崎遺跡調査箇所



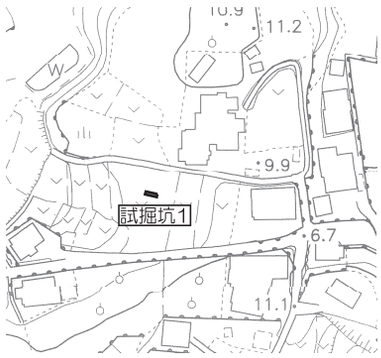
第22図　H29猿崎遺跡土層図

【土層】

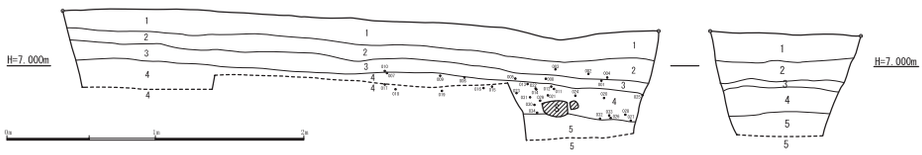
１層：褐灰色粘質土（Hue10YR4/1）耕作土の残土で、下層の土と撹拌した状況が窺える。
２層：明褐色粘質土（Hue7.5YR5/6）粘性強く、しまり強い。10㎝～拳大の礫を５％程度含む。黒曜石片が１点出土した。
３層：明黄褐色粘質土（Hue10YR6/6）粘性強く、しまり強い。１㎝大の黒色礫を５％、10㎝～人頭大の礫を20%程度含む下部になると風化礫が多くなる。遺物は出土しなかった。

３　赤島遺跡（あかしまいせき）

（１）調 査 地　諫早市久山町2965-1
（２）調査原因　個人住宅建設
（３）調査期間　平成29年９月26日～
　　平成29年10月20日
（４）調査区分　範囲確認調査（４㎡）
（５）調査措置　慎重工事



第23図　H29赤島遺跡調査箇所



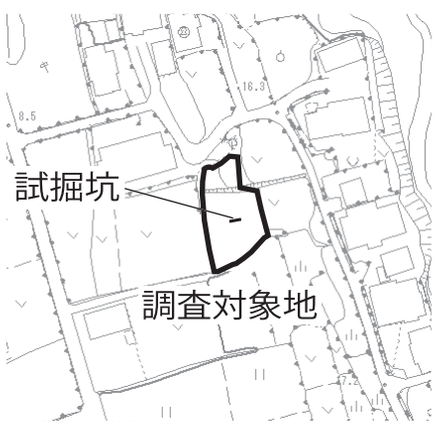
第24図　H29赤島遺跡土層図

【土層】

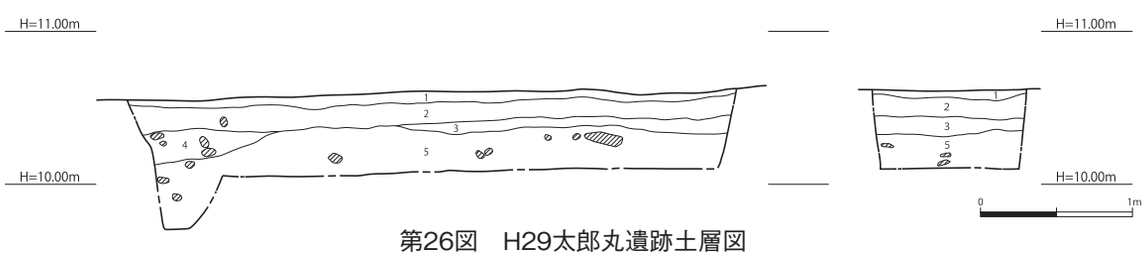
１層：暗灰褐色砂質土層（Hue10YR4/1褐灰）調査対象地全域に堆積する砂質土であり、東から西へ傾斜している。層中には多量の黒曜石片及び陶磁器片が確認されている。遺物が撹乱されている原因は耕作土であるためと思われる。遺物は大部分は摩滅している。
２層：淡茶褐色砂質土層（Hue10YR4/4褐）１層と土質がよく似た砂質土である。10cm前後の厚さで堆積しており、１層と同様に東から西へ傾斜している。また、層中からは黒曜石が出土している。
３層：灰褐色粘質土層（HueN6/灰）２層の下位に約10cm程の厚さで堆積するやや粘性を帯びる土である。１層・２層と同様に東から西へ傾斜している。層中からは黒曜石が出土している。
４層：暗褐色混礫硬質土層（Hue10YR2/2黒褐）３層の下位に20cm程堆積する風化礫を含む硬質な土である。１層～３層と同様に東から西へ傾斜している。層中には黒曜石・縄文土器片・土師器片・須恵器片が多量に出土していることから当地における主たる包含層であると考えられる。
５層：暗茶褐色粘質土層（Hue10YR4/6褐）４層の下位に堆積する粘性を帯びる土であり、少量ながら風化礫片を含む。遺物は確認されない。当地における地山である可能性が考えられる。試掘坑西側１ｍを深掘りした際に確認した層であるため傾斜を確認することは出来なかった。

４　太郎丸遺跡（たろうまるいせき）

（１）調 査 地　諫早市宗方町701-1外２筆
（２）調査原因　個人住宅建設
（３）調査期間　平成29年10月20日～
　　平成29年11月17日
（４）調査区分　範囲確認調査（４㎡）
（５）調査措置　慎重工事



第25図　H29太郎丸遺跡調査箇所



第26図　H29太郎丸遺跡土層図

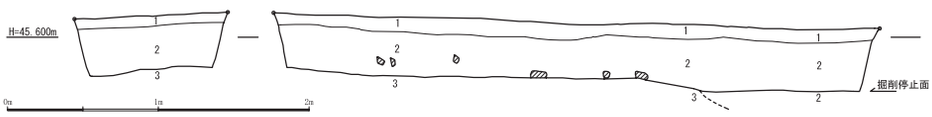
【土層】

１層：暗褐色土層（Hue7.5YR3/4）耕作土。ふわふわしたしまりのない土。土器片、砥石片、安山岩剥片出土。
２層：暗褐色土層(Hue7.5YR3/4)耕作土。しまりはあるがやわらかい。直径２㎜～５㎜程の赤色粒、白色粒と直径５㎜～10㎜程の黄色粒が混じる。陶磁器片、土器片、黒曜石片が出土。
３層：黄褐色土層（Hue10YR5/6）鉄分沈着層。赤っぽく帯状に入る。少しガリガリした固い粘質の砂質土。直径１㎜前後の白色粒、５～８㎜程の赤色粒、１～2cm程の黄色粒が混じる。陶磁器片、土器片、黒曜石片、キセルが出土。
４層：褐色土層（Hue10YR4/4）カクラン。直径４～７cm、または10cm以上の亜角礫が多く混じる。固い粘質の砂質土。金属片・陶磁器片・土師器片が出土。
５層：暗褐色土層（Hue10YR3/4）とても固いガリガリの層。直径１㎜前後の白色粒が多く混じる。５㎜程の赤色粒もみられる。また直径1.5～２cm、３～４cmの小礫が非常に多く混じり、下の方には直径15～20cm大の礫も見られる。土石流土と思われる。黒曜石片、陶磁器片が出土。

５　正久寺地区圃場整備計画の圃場６７

（１）調 査 地　諫早市正久寺町612及び649-1の畑地内
（２）調査原因　圃場整備計画
（３）調査期間　平成29年11月17日～
　　平成30年１月31日
（４）調査区分　試掘調査（８㎡）
（５）調査措置　慎重工事

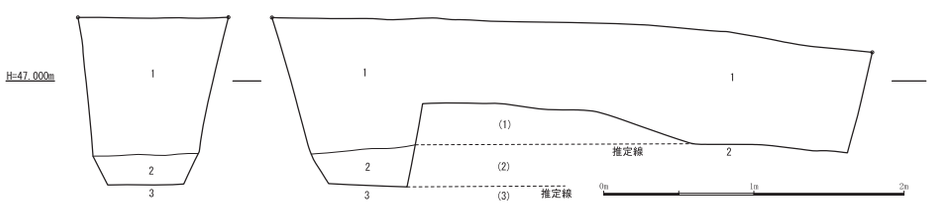
第27図　H29正久寺地区の圃場67調査箇所



第28図　H29正久寺地区の圃場67土層図（試掘坑１）

【土層】

１層：茶褐色軟質土層（Hue7.5YR4/3褐）耕作土である非常に軟質な土質である。層中に黒曜石片、土器片、瓦片、磁器片を含む。
２層：明茶褐色粘質土層（Hue2.5YR4/2灰赤）パミスを含む粘質な土である。層中からビニールと黒曜石が確認される。畑を造る際に重機により攪乱されたと思われる。畑が作られる以前の表土であった可能性が考えられ、黒曜石が出土していることからかつては包含層が良好に残存していた可能性がある。
３層：明茶褐色粘質土層（Hue2.5YR4/2灰赤）試掘坑１・２に堆積する２～20cm程の礫を含む非常に硬質な土である。試掘坑１・２周辺の地山と思われる。



第29図　H29正久寺地区の圃場67土層図（試掘坑２）

【土層】

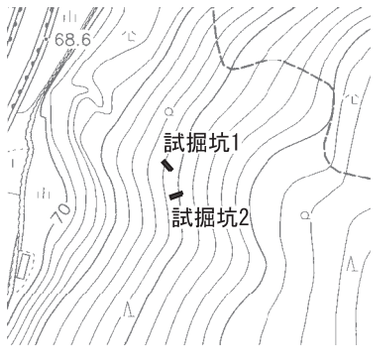
１層：茶褐色軟質土層（Hue7.5YR4/3褐）耕作土である非常に軟質な土質である。層中に黒曜石片、土器片、瓦片、磁器片を含む。
２層：明茶褐色粘質土層（Hue2.5YR3/4暗赤褐）３cmから５cm程の礫を含む粘質土である。遺物は確認されない。上層は攪乱された盛土である可能性が高い１層であるため、果樹園が造られる際に層の上部は削平され１層と混ぜられたと思われる。そのため２層の堆積状況から旧地形を推測することは困難である。また、果樹園が造られる以前の堆積状況についても推測することは難しい。遺物が出土していないため詳細は不明であるが、包含層であった可能性も考えられる。
３層：明茶褐色粘質土層（Hue2.5YR4/2灰赤）試掘坑１・２に堆積する２～20cm程の礫を含む非常に硬質な土である。試掘坑１・２周辺の地山と思われる。

６　駄森積石塚（だもりつみいしづか）は、第３節１（63ページ）に詳細報告

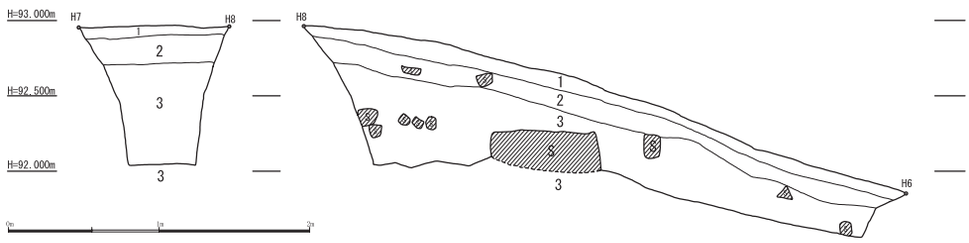
平成30年度調査（調査２箇所）

１　尾和谷城跡（おわたにじょうあと）

（１）調 査 地　諫早市下大渡野町2367-2及び2368-2
（２）調査原因　鉄塔建設
（３）調査期間　平成30年10月19日～
　　平成30年12月３日
（４）調査区分　範囲確認調査（８㎡）
（５）調査措置　慎重工事



第30図　H30尾和谷城跡調査箇所



第31図　H30尾和谷城跡土層図（試掘坑２）

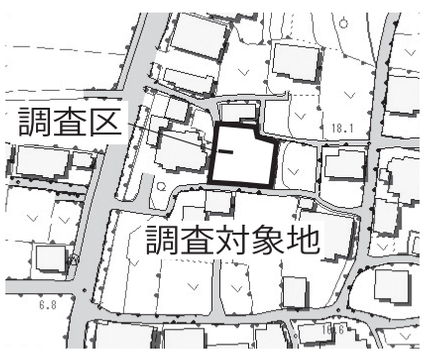
【土層】
１層：暗褐色軟質土層（Hue10YR3/1）地表に８cm程堆積する軟質土である。腐葉土と思われる。遺物は確認されない。
２層：暗黄色混礫土層（Hue2.5YR5/6）10cm程の礫を含むやや硬質な土である。植物根が著しい。遺物は確認されない。
３層：暗赤褐色混礫硬質土層（Hue5YR3/2）10cmから80cm程の礫を多く含む硬質な土である。地山と考えられる。遺物は確認されない。

２　大渡野番所跡（おわたのばんしょあと）は、第２節２（29p）に詳細報告

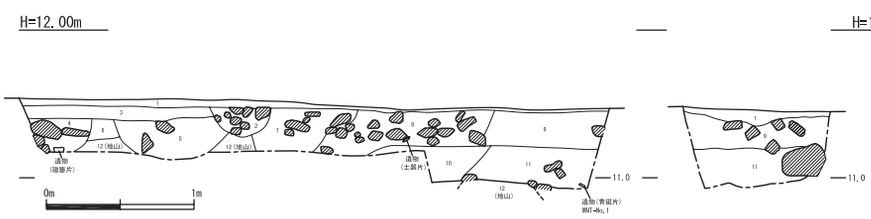
令和元年度調査（調査８箇所）

１　宗方筒井遺跡（むなかたつついいせき）

（１）調 査 地　諫早市宗方町617番１
（２）調査原因　個人住宅建設
（３）調査期間　平成31年４月18日～
　　令和元年５月23日
（４）調査区分　範囲確認調査（４㎡）
（５）調査措置　慎重工事



第32図　R1宗方筒井遺跡調査箇所

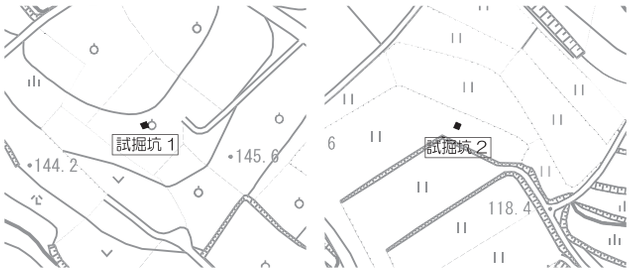


第33図　R1宗方筒井遺跡土層図

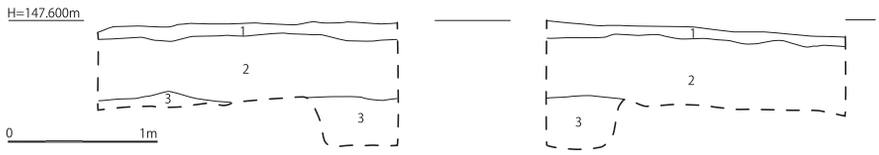
【土層】
１層：砕石土。宅地面。整地のために入れた砕石層。非常に固い。表面には砕石を敷いている。
２層：暗オリーブ褐色土（Hue2.5YR3/3）５cm～10cm程の亜角礫、砕石、瓦片などが混じる新しいカクラン。整地時の埋め穴。
３層：にぶい黄褐色土（Hue10YR4/3）小礫や赤色粘土のブロックが多く混じる。整地時の埋め土。
４層：黒褐色土（Hue10YR3/2）大小の亜角礫からなるカクラン。陶磁器片、瓦片、ガラス片、プラスチックなどが混じる。
５層：暗褐色土（Hue10YR3/3）非常に固い。粘性ややあり。１cm前後の礫が多く混じる。赤色粒、白色粒も多く含む。
６層：黒褐色土（Hue10YR2/2）しまりは弱くボソボソしている。やや砂質で粘性も弱い。
７層：黒褐色土(Hue10YR2/2)しまりはあるがやわらかい。５cm～15cmの亜角礫が多く混じる。プラスチックや貝殻などが混じる現代のカクラン。廃棄土坑。
８層：暗黒褐色土(Hue10YR3/3)しまりは弱く、粘性もやや弱い。拳大～10cm前後の亜角礫を多く含む。整地時の混じりの土。ガラス片、ビニールが混じる。
９層：暗褐色土（Hue10YR3/4）やや砂質で粘性は弱いが非常に固い。８cm～15cmの大小の礫が混じる。整地時の混じりの土。
10層：黒褐色土（Hue10YR2/3）11層と同じ土だが11層に比べてしまりは弱い。
11層：黒褐色土（Hue10YR2/3）固くしまっている。粘性はやや強い。５mm程の炭化物が僅かに混じる。土師器の小片が数点、青磁片が１点出土した。
　　中世頃の包含層の可能性が考えられる。検出したピット遺構もこの層に伴うと思われる。
12層：にぶい黄褐色土（Hue10YR4/3）やや砂質の非常に固くてもろい土。２cm以下の風化礫を多く含む。３cm～６cmの亜角礫も混じる。地山としたが
　　土石流の堆積層と思われる。

２　原ノ堤遺跡（はらのつつみいせき）

（１）調 査 地　諫早市白原町2336-2及び2411
（２）調査原因　農村地域防災事業（ため池整備事業）
（３）調査期間　令和元年11月14日～
　　令和元年12月17日
（４）調査区分　範囲確認調査（８㎡）
（５）調査措置　慎重工事



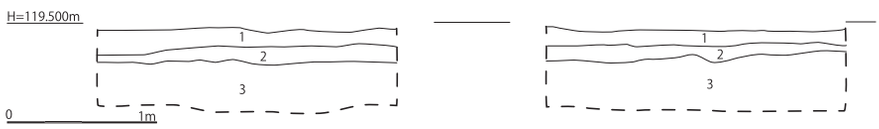
第34図　R1原ノ堤遺跡調査箇所



第35図　R1原ノ堤遺跡土層図（試掘坑１）

【土層】

１層：黒色土（Hue7.5YR1/2）表土。層厚約10cmで、炭化物を多く含み付近の状況から現代の焚火等の炭化物と思われる。また黒曜石が１点出土している。
２層：褐色粘質土（Hue7.5YR4/4）電球の破片と思われるガラス片や２層下部で植木鉢の破片が確認されており層厚40cmほどあることから近現代の整地層と思われる。
３層：褐色粘性土（Hue10YR4/6）遺物は出土せず、塊状の軽石を含んでおり自然堆積層と思われるが　掘削範囲が狭いため正確な判断は出来なかった。３層共に水平堆積であるが遺構の確認は出来なかった。



第36図　R1原ノ堤遺跡土層図（試掘坑２）

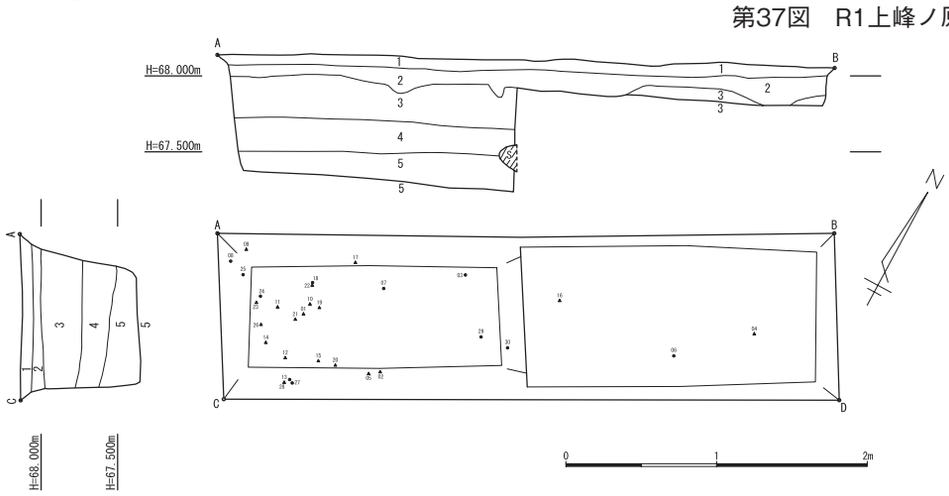
【土層】

１層：暗褐色土（Hue10YR3/3）耕作土。層厚10 ～ 20cm程度である。
２層：暗褐色粘土（Hue10YR3/3）水田の水田盤であり約10cm程度の層厚を持つ。暗褐色（Hue5YR3/6）を筋状に含む。
３層：暗褐色粘質土（Hue10YR3/4）は軽石や大き目の石等を含み針金やお菓子の包装ビニール等が確認されていることから水田の造成土と思われる。遺物遺構共に確認できていない。

３　上峰ノ原遺跡（かみみねのはらいせき）

（１）調 査 地　諫早市下大渡野町62番１外２筆
（２）調査原因　個人住宅建設
（３）調査期間　令和元年12月18日～
　　令和２年２月20日
（４）調査区分　範囲確認調査（４㎡）
（５）調査措置　現地保存

第37図　R1上峰ノ原遺跡調査箇所



第38図　R1上峰ノ原遺跡土層図

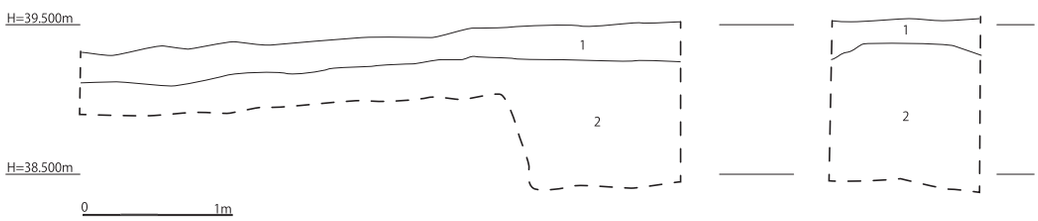
【土層】

１層：暗赤褐色軟質土層（Hue5YR3/4）耕作土であり軟質な土である。層中から黒曜石片、石鏃（黒曜石）、磁器（青磁）片、近代の磁器片、陶器片などが出土している。
２層：暗赤褐色土層（Hue5YR3/3）１層に比べやや硬質な土である。１層と同様に耕作土であった可能性が高い。なお、遺物は確認されなかった。
３層：暗褐色硬質粘質土層（Hue7.5YR3/4）粘性を持つ土であり、部分的に硬質な箇所が確認される。層中からは黒曜石片、土器片が出土している。当地における主たる包含層と考えられる。なお、土器片は縄文式土器であると思われる。また、土器片の胎土及び石鏃の形状より縄文時代前期の所産と推測される。
４層：暗褐色土層（Hue7.5YR3/3）３層に比べ、粘性及び硬性ともに弱い、層中からは黒曜石片１点、土器片１点が確認された。
５層：暗黄褐色混礫硬質土層（Hue10YR4/4）10cmから20cm程の礫を含む非常に硬質な土である。遺物は確認されない。当地における地山と考えられる。

４　小栗Ｃ地点遺跡（おぐりしーちてんいせき）

（１）調 査 地　諫早市小川町752-2の一部、753
（２）調査原因　個人住宅建設
（３）調査期間　令和元年12月26日～
　　令和２年２月18日
（４）調査区分　範囲確認調査（４㎡）
（５）調査措置　慎重工事

第39図　R1小栗Ｃ地点遺跡調査箇所



第40図　R1小栗Ｃ地点遺跡土層図

【土層】

１層：極暗赤褐色土（Hue5YR2/3）耕作土。層厚約20～30cmで、炭化物を含み付近の状況から現代の焚火等の炭化物と思われる。竹の根等の植物痕が多く見受けられた。調査区内の掘削時には遺物は確認出来ていないが、調査区外から黒曜石が１点表採で確認された。層序境界で遺構確認を行ったが遺構の確認は出来なかった。
２層：黒褐色細粒土（Hue5YR2/2）層厚80cm以上あり、部分的にブロックとして黒ずんだ部分が見受けられる。植物等の根の跡と思われる。深度約１ｍほど掘削したが３層目は確認出来なかった。

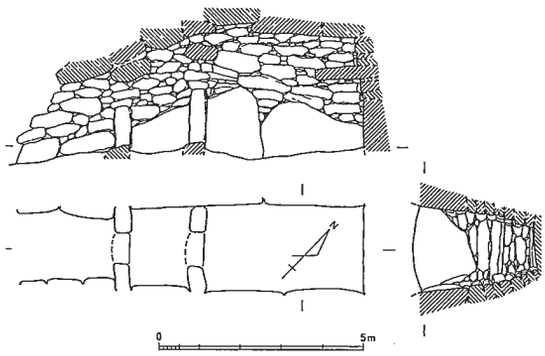
５　ジブの墓（早見町）は、第２節３の禁教期関連調査（53ページ）に詳細報告。
６　ビッチの墓（天神町）は、第２節３の禁教期関連調査（57ページ）に詳細報告。
７　金谷町遺跡の織部灯籠（金谷町71）は第２節４の禁教期関連調査（61ページ）に詳細報告。
８　新道町の織部灯籠（新道町976-1）は第２節４の禁教期関連調査（62ページ）に詳細報告。

第２節　保存目的の調査

１　市指定史跡「大峰古墳」

（１）石室測量の契機

熊本地震により諫早市北部の多良岳山麓にある大峰古墳一体も揺れ、所有者から石室の入り口にあたる部分の石材が一石崩落したと報告があった。そのため、今後起こりうる地震などの自然災害による石室崩壊に備えるため、市教育委員会では市内遺跡発掘調査事業の一環として、保存目的の石室測量調査を平成28年12月から平成29年１月まで実施した。



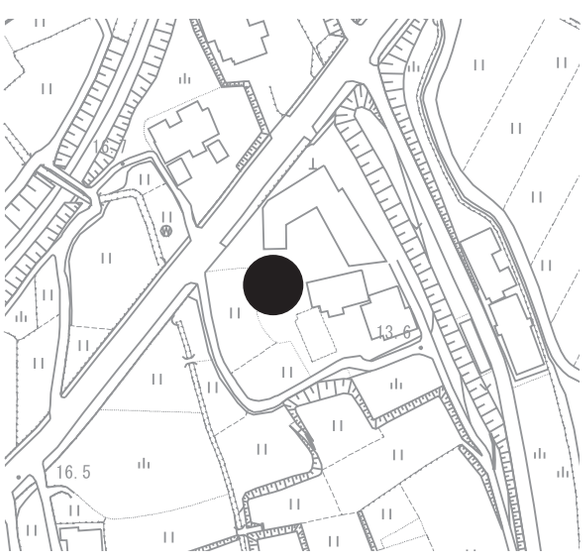
第41図　大峰古墳略測図

（２）石室調査の履歴（第41図：略測図）

大峰古墳の石室は、平成10（1998）年長崎県刊行の「原始・古代の長崎県　通史編」の548pに略測図（右側壁・奥壁・平面の３面）が掲載され次のように紹介されている。「南西方向に開口する両袖式で、複室の横穴式石室をもつ古墳である。墳丘は高さ３m以上、円部の直径20m以上あったものと思われる。石室の長さ8.6m、玄室の長さ3.8m、幅2.1m、前室の長さ1.5m、幅1.9mで、天井石７枚が残っている。奥壁部分には一枚の大型の板石で棚状に施設を設けている。腰石には巨大な石材を使用し、その上部にはやや小形の石を横に積み、隙間に小石を詰め込んでいる。鉄刀が出土したと伝えられているが、詳細は不明である。６世紀代に築かれたものと思われる。」

その後、平成20（2008）年、市教育委員会刊行の「丸尾古墳―小長井町丸尾地区急傾斜崩壊対策事業に伴う発掘調査報告書―」では20pで丸尾古墳・大峰古墳・長戸鬼塚古墳の石室平面図を比較し３古墳を次のように分析する。「三者の共通する属性は複室構造の横穴式石室であること、大峰、丸尾では高窓施設を有すること、丸尾、長戸鬼塚では背刻画を有することであり、三者が有機的な関連性を有していたであろうことを髣髴とさせる。」大峰古墳については次のように紹介する。「大峰古墳は複室構造で玄門、羨門の２箇所の楣石上で天井石との間に大きな空間が存在している。楣石は両側壁に渡しかけられ、ちょうど石梁のような景観を見せてい

第42図　「大峰古墳」位置図（S=1/25,000）



第43図　「大峰古墳」位置図（S=1/2,500）

る。また奥壁と両側壁に架構した石棚を有する点でも特徴的である。」

（３）石室測量の報告（第44図：今回測量図）

基準点測量と3Dレーザースキャナーにより石室内部を計測し、得られたデータを解析し、CADソフトで図化し、成果品は解析結果を方眼紙上に鉛筆で縮尺1/10作図とした。基準点測量とも連動させているため、図面上には標高も記録した。面的記録であるため、次の点はこれまでの石室測量で用いられてきた作図法と異なるので注意していただきたい。側壁に接する石材の断面を採用しているため、両側壁の断面は左右で異なる図となる。

まず、床面の状況から見ていくと、部分的に凹凸があり側壁の隙間などから崩落した土砂が堆積していることがうかがえる。凹凸の最も深い部分は、前室と羨道の右側壁の袖石内側にあり標高は14.86mである。框石上面の標高は15.06mであるため、この部分は床面が20cmほど掘削され部分的に破壊されている可能性がある。また、奥壁側には厚く土砂が堆積しており、奥壁の腰石全体及び石棚上の奥壁は部分的に露出しているのみで全体像は判然としない。

本稿では、框石上面の標高を仮の床面として、高さの基準（15.06m）として報告する。天井石は７枚存在し、玄室奥の天井石①から水平の長さ105cm仮の床面からの高さ306cm（18.12m）、奥壁から二つ目の天井石②は長さ171cm高さ305cm（18.11m）、奥壁から三つ目の天井石③は天井石②の上に乗る最上部の天井石となり可視部分の長さは48cm高さ339cm（18.45m）、次に玄室と前室にかけての天井石④は長さ169cm高さ300cm（18.06m）となる。このため天井石②の厚さは34cm以上、天井石④の厚さは39cm以上あることがわかる。前室の天井石⑤は長さ126cm高さ264cm（17.7m）厚さは49cm、天井石⑥は長さ88cm高さ230cm（17.36m）厚さ33cm、天井石⑦は羨道にかかる天井石で長さ137cm高さ162cm（16.68m）厚さ70cmとなる。これら７枚の天井石はすべて一枚で側壁に載っており、可視範囲で玄室から前室にかけての５枚は幅が３m近くあり、羨道上の２枚は幅が2.5m近くある石材と想定できる。

平面規模は、玄室は長さ396cm、幅203cm（奥壁部分）・幅197cm（玄門部分）、框石は幅84cm長さ50cm、前室は長さ150cm、幅182cm（玄室側）幅203cm（羨道側）、羨道は長さ270cm、幅140cm（羨門部分）、羨門の幅79cmである。現状での石室全長（玄室＋框石＋前室＋羨道）は900cmとなる。

次に腰石の可視範囲の大きさと仮の床面からの高さを記録していく。玄室奥壁に用いられた石材は幅190cm高さ154cm（最高点標高16.59m）、玄室の右側壁に用いられた石材は長さ271cm高さ1.2m（最高点16.24m）、右側壁の玄室から前室にかけての腰石は長さ331cm以上高さ160cm（16.66m）、羨道の右側壁は長さ94cm高さ41cm（15.47m）と108cm高さ46cm（15.52m）の２石となる。

玄室の左側壁に用いられた石材は長さ251cm高さ137cm（16.43m）、玄室奥から２石目の腰石は長さ144cm高さ105cm（16.11m）、前室の左側壁の腰石は長さ130cm高さ81cm（15.87m）、羨道の左側壁は長さ113cm高さ25cm（15.31m）である。羨道の左側壁は墳丘側から石材の反対側が確認でき、この石材は奥行きが約2.5mあり、天井石⑤と変わらない大きさである。石室内に見えている範囲は小さいが大きな石材を選定しており、このため、他の腰石も同様に奥行きがある石材を選定していると想定できる。

玄室の石棚は長さ120cm厚さ40cm幅203cm以上で上面標高の最高点17.36m下面の標高16.89m、床面からの高さ183cm、天井石①との間には76cmの隙間がある。玄門上にかけられた楣石は幅111cm厚さ58cm長さ197cm以上

で上面17.53m下面16.95m、天井石④との間には53cmの隙間がある。羨門上にかけられた楣石は幅106cm厚さ60cm長さ203cm、上面17.21m下面16.6m、天井石⑤との間には15cmの隙間がある。

側壁を構成する石材を観察すると、まず玄室の右側壁であるが石棚下に長さ1.3m厚さ30～50cmの石材を横に長く載せており、石棚より上の石材は１m未満厚さ30～50cmの石材を同じく横に長く載せている。この状況は奥壁でも同じ状況である。また左側壁も同様な状況であるが、石棚上の石材が右側壁よりも若干小さくなる。玄室側壁では石材の隙間に薄い石材を丁寧に充填している。

次に前室を構成する石材であるが、長さ80cm以下厚さ20～30cmの石材が多く利用され、玄室側壁の石材よりも小さい石材を選定している。

玄門の右柱材であるが、大型の右側壁に接して幅58cm厚さ50cm高さ116cm（16.22m）の石材を立てて、その上に４つの石材を重ねて石梁を載せている。玄門の左柱材は、腰石の隙間に入り込むようにして幅60cm厚さ56cm高さ134cm（16.4m）の石材を立ててその上に４つの石材を重ねて石梁を載せている。石梁下面の標高は左が約５cm低く、玄門上の楣石は両側壁に入り込んでいる。

羨門の右柱材であるが､腰石の隙間に入り込むようにして幅60cm厚さ45cm高さ103cm（16.09）の石材を立てて、その上に３つの石材を重ねて石梁を載せている。左柱材は同じように腰石の隙間に入り込むようにして幅67cm厚さ42cm高さ111cm（16.17m）の石材を立てて、その上に２つの石材を載せて石梁を載せている。石梁下面の標高は左が８cm低く、羨門上の楣石も両側壁に入り込んでいる。

（４）石室の特徴

大峰古墳の石室の大きな特徴をあげると次の５点となる。

①玄室平面形が長方形であること。

②側壁は巨大な石材を腰石として置き、その上に小さめの石材を積んでいること。

③玄室には石棚があること。

④玄室と前室、前室と羨道との間に立柱石を立てその上に楣石を載せていること。

⑤天井と楣石は接しておらず空間があること。

⑥⑤の特徴から玄室・前室・羨道の分け隔てなく天井が連続していること。

今後、これらの特徴を有明海沿岸の横穴式石室と比較することによって、郷土の古墳について歴史的な価値を掘り下げていくことができるかと思われる。

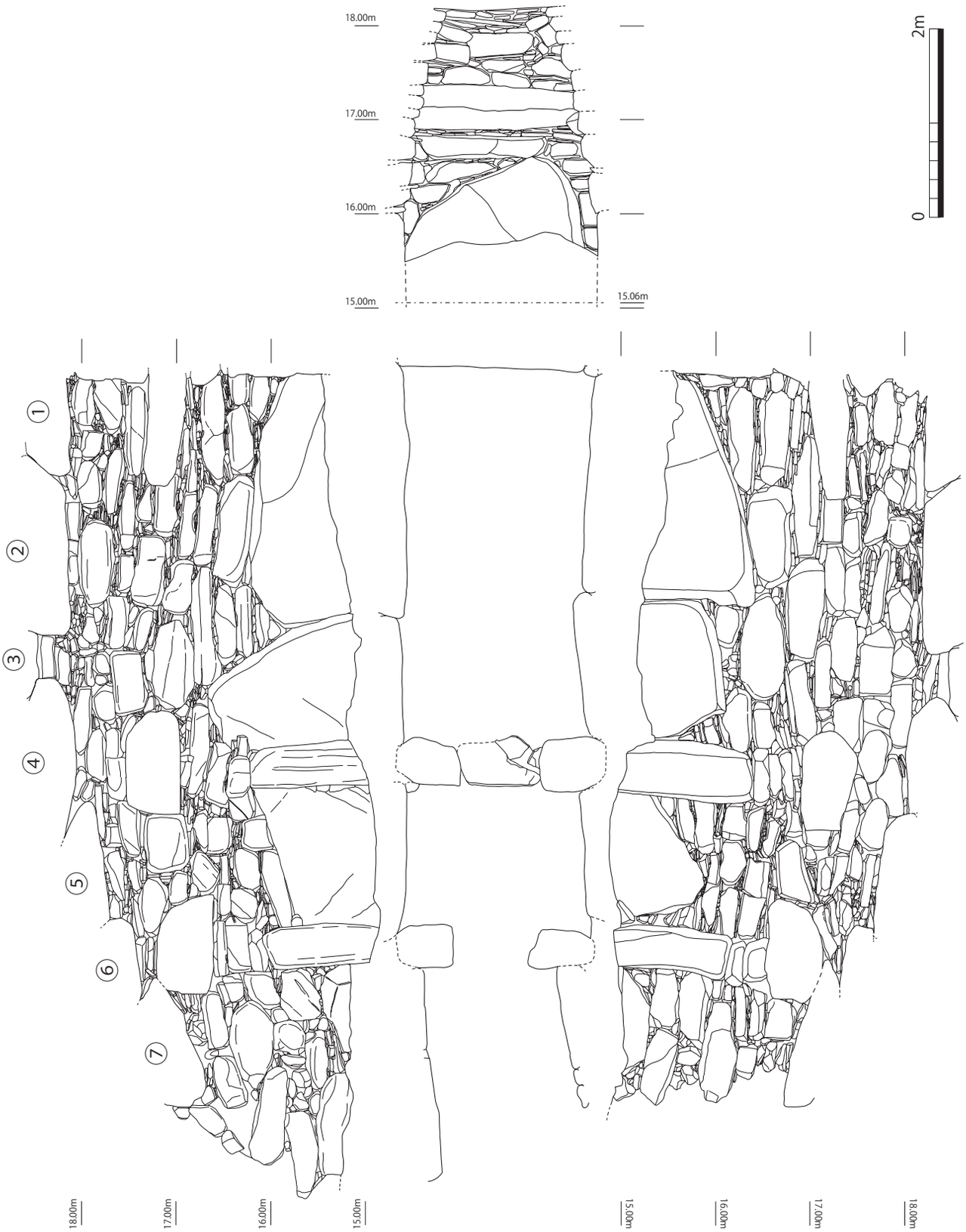
今回の石室測量により、これらの特徴が正確な図面・写真として記録されたことは、石室の崩壊などが発生したときに役立つものであり、市指定史跡の保護を行う上では大きな成果となった。

図版出典

第41図　平成10（1992）年長崎県刊行の「原始・古代の長崎県　通史編」548p

第42図　国土地理院地図「湯江」平成12年発行より作成

第43図　諫早市作成1/2500基本図より作成



第44図　大峰古墳石室実測図（S=1/60）

写真１　大峰古墳の墳丘：北側から

写真２　大峰古墳の墳丘：南側から

写真３　大峰古墳の墳丘：西側から

写真４　大峰古墳の墳丘：石室開口部

写真５　大峰古墳の墳丘：東側から

写真６　大峰古墳：羨道右壁

写真７　大峰古墳：奥壁・石棚

写真８　大峰古墳：玄室から開口部

写真９　大峰古墳：石棚

写真10　大峰古墳：石棚と天井石

写真11　大峰古墳：奥壁と左側壁の腰石

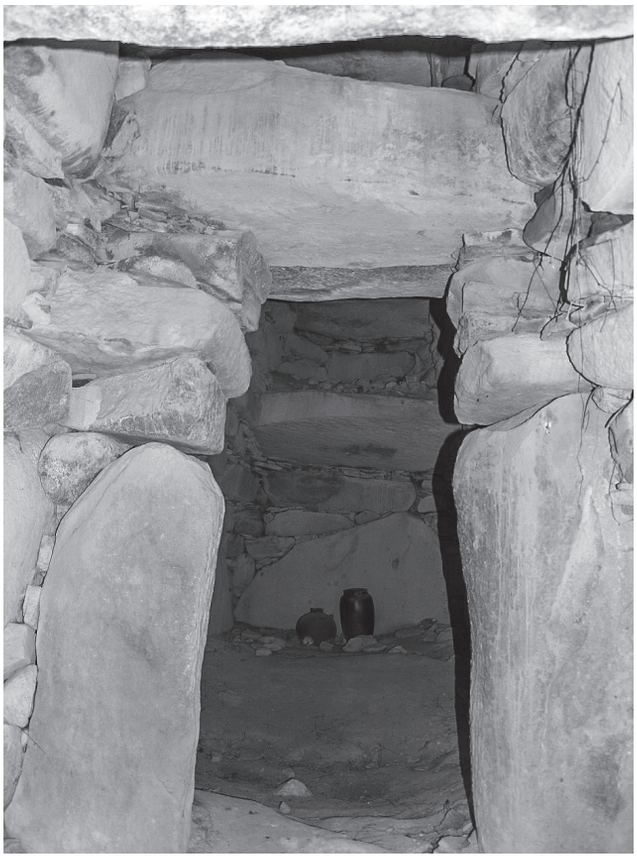


写真12　大峰古墳：玄門から玄室

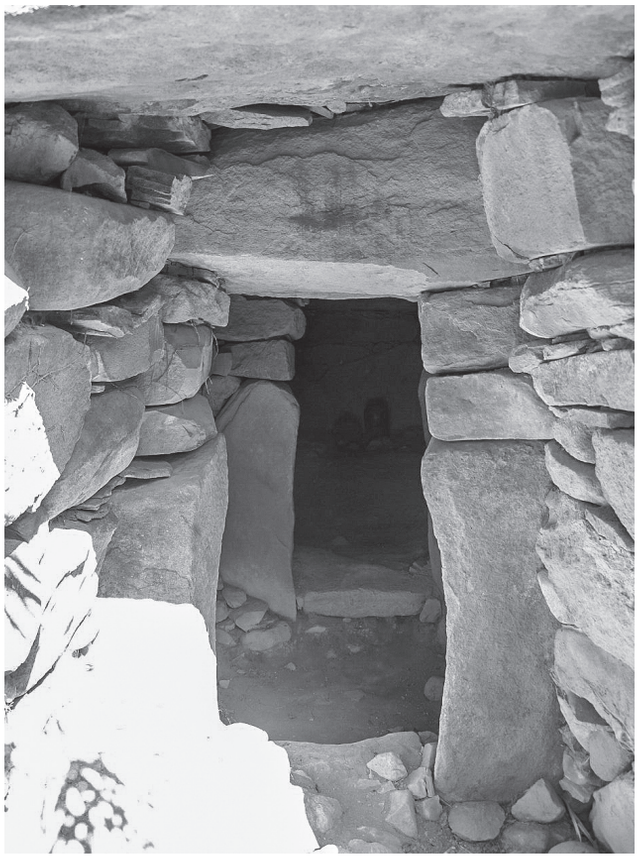


写真13　大峰古墳：羨道から前室

写真14　大峰古墳：奥壁

写真15　大峰古墳：奥壁と右側壁の腰石

写真16　大峰古墳：奥壁と左側壁の腰石

写真17　大峰古墳：玄室の天井石

写真18　大峰古墳：玄室から前室上部の梁石と天井石

写真19　大峰古墳：玄室から前室・羨道

写真20　大峰古墳：玄室調査風景

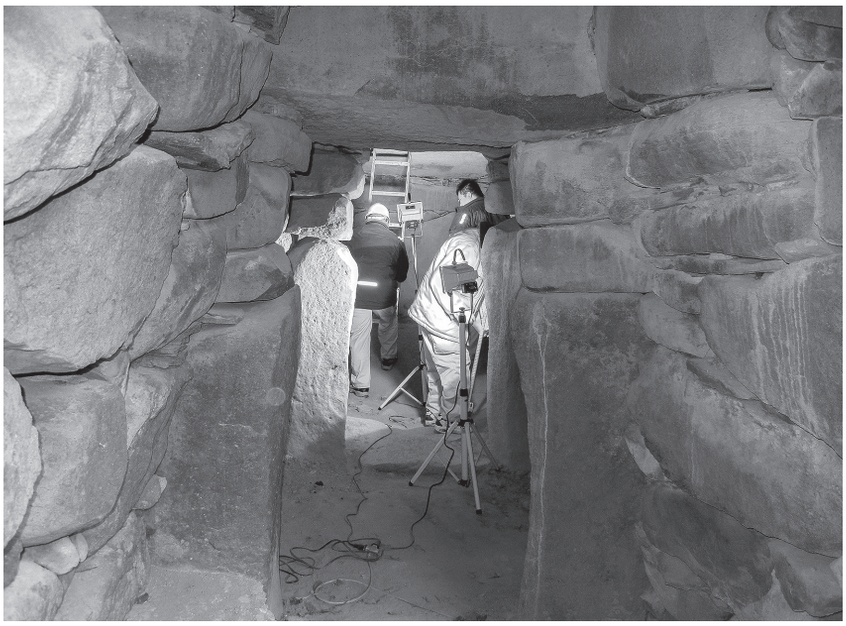


写真21　大峰古墳：調査風景

写真22　大峰古墳：説明板・標柱